TEIKOKU DATABANK Historical Museum

Muse

2014.7
Vol.23

帝国データバンク史料館だより［ミューズ］

温故知人04

「フィルム」と「デジタル」の共存による映像文化の伝承と発信。

株式会社ギンレイシネマックス 代表取締役
加藤 忠さん

《逸品解題》―はかる―

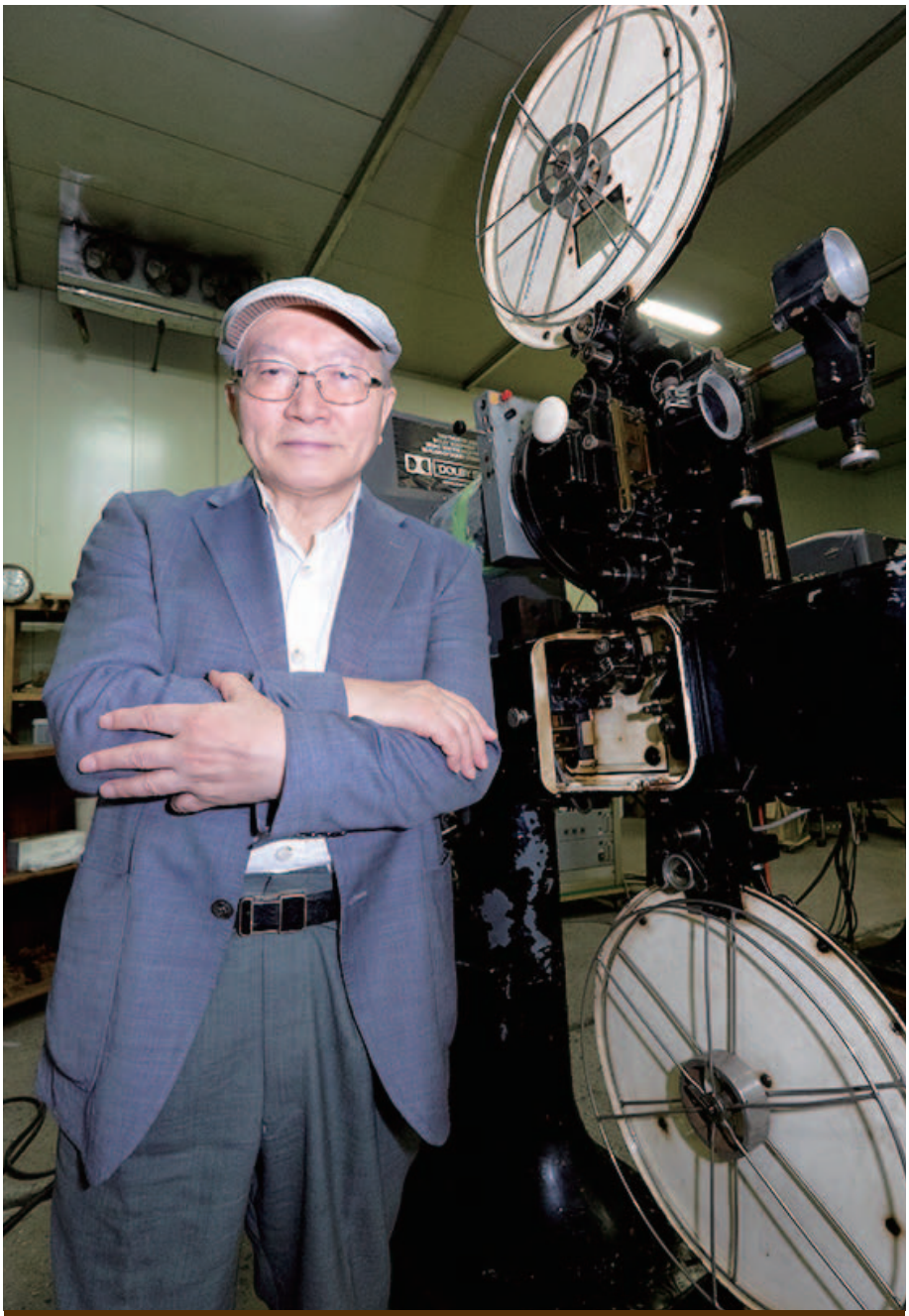
事業所のあった街をたずねて～浜田篇～

温故知人 04
古きをたずねて知に挑む人

「フィルム」と「デジタル」の共存による映像文化の伝承と発信。

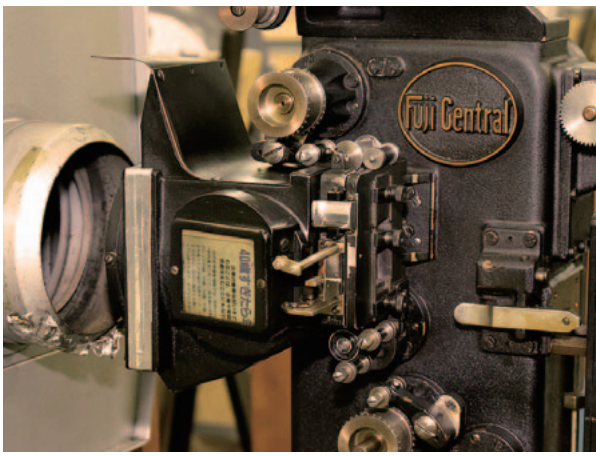
～全国の映画館からフィルム映写機を引き取り、保存～

株式会社ギンレイ シネマックス　代表取締役　加藤 忠さん



加藤 忠さん

東京・神楽坂の名画座「ギンレイホール」を経営しながら、
35 ミリフィルム映写機を全国の映画館から引き取り、
メンテナンスして保存する活動を行う。
2014 年 2 月にはこの活動が評価され、
日本映画ペンクラブの奨励賞が贈られた。



■フィルムからデジタルへの移行、さらに映画館離れも。

１９６０(昭和35)年の７，４５７館をピークに、日本では映画館がどんどん減少しています。映画を観なくなったというよりも、ＤＶＤやテレビの映画専門チャンネルなど、視聴チャネルの多様化が背景となった「映画館離れ」が止まりません。フィルムからデジタル上映に移行するのを機に、全国で映画館が次々に廃業し、最近でも吉祥寺や三軒茶屋の映画館閉鎖が発表されています。

映画館のデジタル化が加速したのは約３年前です。その当時、全国にはまだ３，３００スクリーンあり、映写機も３，０００台以上ありました。それがデジタル化移行に伴い、私どもの調べでは約２，０００台が廃棄されています。名画座にしても大手映画会社直営館にしても、フィルム上映のために１台の映写機を残すのみで、大半は廃棄処分されているのです。

今、私がやっていることは、本来国がやるべきことだと思います。はっきり言って、民間の一映画館がやるようなことではありません。だから逆に目立ってしまって、日本映画ペンクラブ賞までいただくことになったのは皮肉なことです。

■会社のアーカイブとして始まり、現在は全国から映写機を引き取るまでに。

１９９６(平成８)年、ギンレイホールの改良工事に伴い、映写設備を一新。その際、「ローヤルニューＬ型」という映写機２台を、１台で上映できる全自動型映写機と交換しました。引退した映写機は社内で再び組み立てて、来客用に展示していたのです。もともとギンレイホールでは、開業以来40

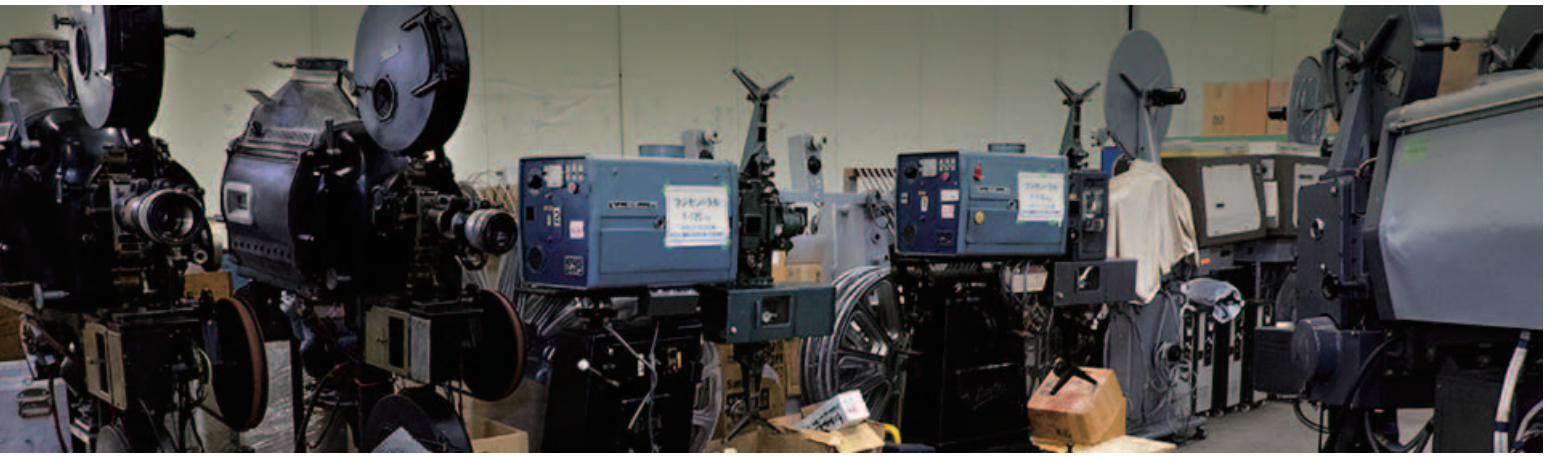
年間上映したすべての映画のポスターやスチル写真、パンフレットなどを残してきました。これらの資料はデジタル化し、データベースで管理しています。映写機を廃棄せずに残したのも、あくまでも会社としてのアーカイブの一環でした。

保存活動が本格的になったのは、国内唯一の35ミリフィルム映写機製造会社の倒産によって、映写機のメンテナンスに必要な部品や工具を手に入れたことがきっかけです。その後は、全国の休・閉館した映画館やデジタル化により映写機を廃棄しなければならなくなったシネマコンプレックス、公共の文化施設、撮影所からの依頼があれば映写機の保管を引き受けています。

「成田映画センター」と名づけたここには今、約１００台の映写機と付属機器、スクリーンなどが保管されています。どれも私が引き取らなければ廃棄されていました。例えば会津若松の栄楽座さん、松本のエンギ座さん、銀座のシネパトスさん、千葉のシネロマンさん、科学技術館と、地域も施設も様々です。映写機のメーカーも国内だけでなく、アメリカ、イタリア、ドイツと多岐にわたっています。

引き取りの依頼が入ると映写技師を連れてトラックで映画館に向かうのですが、映写機は1台３００～４００kgあるので劇場で一度分解し、ここで再度組み立てます。ビルの４階にあった映画館が閉鎖した時は、ちょうどビルの解体中で、壁面に鉄球で穴をあけ、そこから分解した映写機をクレーンで1つずつ降ろしました。銀座のシネパトスは地下でしたので、20段以上の階段を電動で引き上げています。実際、費用も時間も含め、大変な作業です。

引き取った映写機については、使われていた映画館の名前や引き取った日付などを記録しています。これによって、映写機1台1台のドラマも残っていきます。



■若い世代にフィルム上映の魅力と技術を伝えたい。

今、日本には映写技師のベテランが10人ほどいます。彼らの年齢を考えると、なるべく早いうちに若い人たちに技術をバトンタッチしたいと考え、成田映画センターで映写技師を育成することも計画しています。映写機は置いておいただけではダメで、動かさないと劣化してしまう。ここに集まった映写機の大半は、今まで現役だったものばかりですから使えるものがほとんどです。映写機保存活動の本来の役目は、これらをしかるべき場所に「再配置」することです。

私が映写機の再配置で考えているのは、学校です。小学校から大学まで、各学校に映写機を1つ置いて定期的に映画を見せ、映画と接触させる環境を整備するのです。現在配給される映画のほとんどはデジタルですが、フィルム映画も皆さんの目に触れていないもので優秀な作品はまだまだあります。

■フィルムとデジタルは車の両輪。どちらが欠けても文化とは呼べない。

映写機を劣化させないために動かし続けたい。そして、若い人たちにもっと映画と接触する機会を増やしたい。その2つの思いを形にしたのが、「ギンレイホール映画キャラバン隊」です。保存活動の原点でもあるローヤルニューL型を幌馬車に見立てたトラックに積み込み、野外での上映イベントで活用しています。子どもの頃、夏に学校の校庭で野外映画を観るのが楽しみだった自分の映画体験をふまえ、２０１１年に実現させました。東日本大震災の被災地や金沢など、全国で映写会を開催しています。フィルム映画は「興行」としてみれば厳しいですが、町おこしや映画イベントのお手伝いのような活用の仕方は、まだまだあると思っています。

フランスから始まったいわゆる35ミリフィルムは、1秒間24コマという世界統一規格ですから、どの国の作品も掛けられる。デジタルとフィルムは車の両輪のごとく、今後の世界の映画を引っ張っていく、どちらか片方が欠けてもだめだというのが私の考えです。古いものを排除していくのではなく、新しいものと共存させていくことこそ、文化だと思うのです。そのために、鉄屑になる前に映写機を救いたいのです。

加藤さんの夢が詰まったキャラバントラック。映写機を引き取りに行く際にも使用する。

逸品解題 はかる

企業の歩みを語る上で欠かせない「もの」がある。原点でもあり、象徴でもある「もの」を残し、伝えてきた企業博物館にとってこの一品はまさに逸品である。第4回は「はかる」をテーマにお届けする。

歩度計

江戸時代頃
【セイコーミュージアム所蔵】

携帯して歩行距離を計る

歩度計とは、歩行距離の計測を可能にした、現在で言う歩数計である。使用者が自分の歩幅を設定して使い、この歩度計では10里(約40㎞)まで計測することができる。歩く振動で振り子が動いて距離を表示する仕組みは、現代の歩数計と同じである。

この当時の用途ははっきりしていないものの、後に伊能忠敬が日本地図作成のための実測に、歩度計の原理を応用していたことはわかっている。

また、日本で初めて歩度計を製作したのは平賀源内であり、この歩度計も平賀源内作と見られる。

セイコーミュージアム
■東京都墨田区東向島3-9-7
■TEL: 03-3610-6248
■http://museum.seiko.co.jp

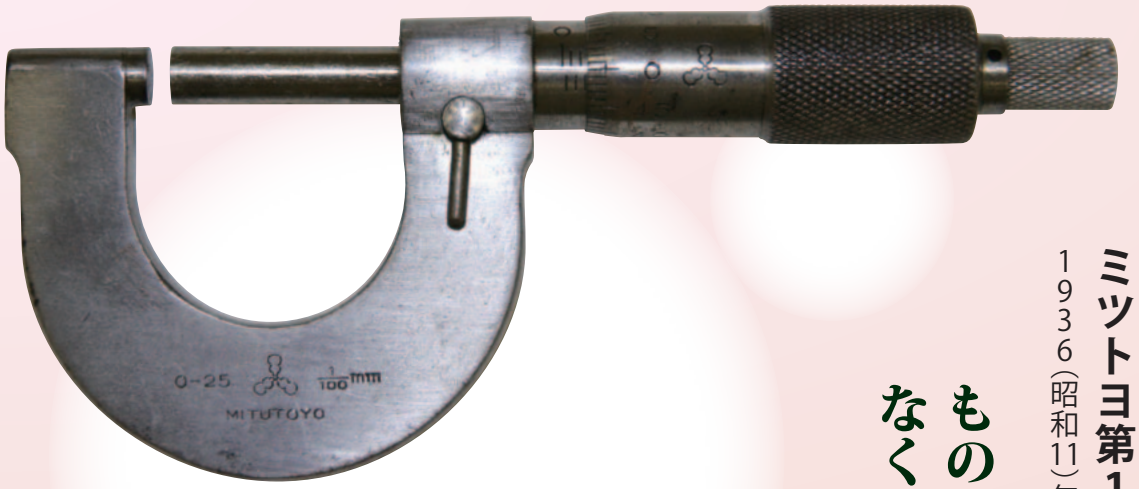
ミツトヨ第1号マイクロメータ

1936(昭和11)年【沼田記念館・ミツトヨ博物館所蔵】

ものづくりの現場になくてはならない測定器

マイクロメータとは、ねじの仕組みを利用して長さをマイクロメートル単位で測る測定器である。金属板の板厚など対象物を挟んで測るもので、現代のあらゆる工業製品づくりを支えている。

昭和初期の日本には、ドイツ、アメリカ、スイス、スウェーデンからの輸入品しかなく、なかでもスウェーデン・ヨハンソン社のものが最高級品とされていた。ミツトヨでは、ヨハンソン社製マイクロメータを目標に国産化を進め、1937(昭和12)年に最初のロット100個がようやく完成した。この100個の中で特に出来栄えの良いもの17個を残し、後の83個は「お葬式」と称して床下に埋めた。検査を甘くして品質・性能を落とすようなことは絶対にしないという決意を示したのである。



デジタルストップクロック

1964（昭和39）年
【セイコーミュージアム所蔵】

東京オリンピックのタイムを計測

50年前に開催された東京オリンピックで、セイコーは初めてオリンピックの公式計時を担当した。大会では、バスケットボールやホッケー、カヌーなど競技ごとにストップウォッチを製作したり、短距離走では1人の選手に対して3人体制で計測していたことは意外に知られていない。

数あるストップウォッチの1つがこのストップクロックである。マラソンなど時間の長い競技のためにつくられたもので、実際に東京オリンピックでは陸上競技の中・長距離レースで使用された。1/100秒まで計測できる。デジタルとは言え液晶表示はまだなく、該当数字が光るというものであった。機能としてはストップ「ウォッチ」であるが、その大きさからストップ「クロック」と名づけられた。

ヨハンソン社製ブロックゲージセット103個組

1954（昭和29）年【沼田記念館・ミツトヨ博物館所蔵】

すべての長さの基準となる

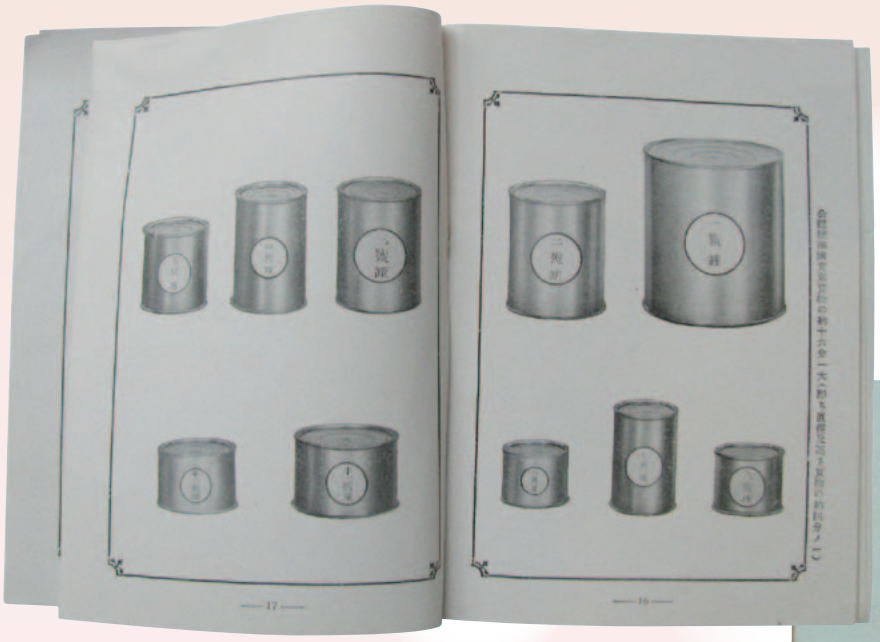
ブロックゲージは、実用的な長さ基準器としてマイクロメータやノギスなど測定工具の校正や寸法基準などに使用され、国家標準器へのトレサビリティを支えている。適当な寸法のブロックゲージを何個か組合せて、互いに密着させることによって個々のゲージの寸法の和に等しい任意の寸法を得ることができる。長さが光速度で定義されている現在でも、「長さ基準器」のツールとして欠かせない。

ブロックゲージはそれまで部品の数だけ必要だったゲージを、「より少ない数でより多くの寸法を得る」ために、スウェーデンのカール・E・ヨハンソンが考案。苦心の末に102個のブロックで2万通りの寸法を得ることに成功した。寸法の安定性や耐摩耗性が要求されるため、素材はスチールが用いられていたが、その後に、ガラス製やセラミック製などが出されている。

沼田記念館・ミツトヨ博物館
■神奈川県川崎市高津区坂戸1-20-1
■TEL: 044-813-8201
■http://www.mitutoyo.co.jp/corporate/hall/

『罐詰と罐の話』
1937（昭和12）年【容器文化ミュージアム所蔵】

缶詰の規格統一を周知するカタログ



1877（明治10）年、明治政府による官営の缶詰工場が石狩につくられ、サケ缶の商業生産が始まった。以来、日本の缶詰工場は、生産した加工食品を工場内で職人が一つ一つつくった缶に詰めて出荷するというスタイルを続けていた。そのため、大正初期のわが国では缶の規格がなく、1ポンド缶だけで85種類もあったという。

高碕達之助は東洋製罐株式会社を創立した当初から「製缶」と「缶詰製造」の分離の必要性を説いて回り、他社にも呼びかけをしたと言う。さらに製缶を機械化するためには缶のサイズを規格化していく必要があった。業界と得意先双方から賛同を得るには大変な時間と労力を要したが、その頃につくられた規格によって缶詰の大きさが統一化され、缶詰業界は大きく発展した。現在も「食品缶詰用金属缶　JIS」としてその大きな役割を果たしている。

打検棒
昭和40年代後半【容器文化ミュージアム所蔵】

缶を叩いて品質を測定

1914（大正3）年、わが国で缶詰の船内製造が始まった。カニやサケといった水産物を船内で缶詰めまで仕上げるのである。この工船に乗っていた船員のキセルがたまたま缶詰に触れたところ、音が違って聞こえたことから、缶詰を棒で叩いて、量の不足や中身の変質などの品質検査を行う方法「打検」が始まったといわれている。

打検棒は、当初は木製であったが、現在は鋼製に変わっている。棒の先が球になっており、音と振動で判別することができる打検士の感覚が、まさに缶の品質を見極めている。

容器文化ミュージアム
■東京都品川区東五反田2-18-1　大崎フォレストビルディング1階
■TEL: 03-4514-2000
■ http://package-museum.jp/

逸品変遷 4

秤乃館

個人で収集した秤の軌跡と未来。秤たちの行く末。

① 安土桃山時代の銀秤

② 江戸時代の両替商が使っていた天秤。分銅の形は地図記号の銀行マークになった

③デニール秤（ドイツ製）。糸の太さや繭の質量を量るためのもの

日本計量史学会会員　元秤乃館 館長 **秤屋（はかりや） 健蔵氏**

今年3月末、私が館長を務める私設博物館「秤乃館（はかりのやかた）」を閉館しました。

骨董好きだった私が知人を介して偶然手に入れ、秤を収集するきっかけとなったのが、こちらの写真にある、安土桃山時代の「銀秤」でした（写真①）。金銀や薬、紅などの売買に使われたとされ、0.1グラムまで計れるという精度を持っています。収集するほど秤の奥深さを知らされ、誰もが信頼していた道具であると考えるようになりました。ギリシャ神話には、秤を手にした法の女神テミスが登場しますし、弁護士バッジのモチーフに使われている天秤は、公正や平等の象徴です。また、人は生まれてすぐに体重と身長を計ってもらい、暮らしの中でも密接なつながりがあります。収集し始めて15年ほど経った頃から、秤を後世に伝える役割を担いたいと考えるようになり、1991（平成3）年に「秤乃館」を開館しました。45年間かけて収集した国内外の秤は1万点におよび、国立科学博物館や日本計量史学会からも評価をいただいていました。

閉館することは、私自身の年齢や体調のこともあって数年前から考えていました。できれば地元に残したいと思い、三重県四日市市に働きかけましたが、残念ながらかないませんでした。世界に誇れる秤の博物館を目指して20年以上秤乃館を運営してきた私としては、できれば秤に特化した博物館への寄贈を希望し、探していました。そんな折、長野県松本市で開かれた日本計量史学会で東洋計器株式会社の土田泰秀社長に出会い、「東洋計量史資料館」を見学させていただいた時に社長の人柄に惚れ込み、お付き合いをさせていただくようになりました。そして2年前、全収蔵品を東洋計量史資料館に寄贈する話が実現したのです。

長い年月をかけてコツコツと買い集めた秤は、四日市から離れた松本へ行きましたが、私としては、最高のところに「嫁入り」してくれたと思っています。信州は精密機械の本場ですし、展示スペースも3.5倍ほど広くなりますから、秤乃館ではできなかったことも東洋計量史資料館なら可能です。運営に携わる人が増えることは、史料の維持・管理の点でも喜ばしいことです。

45年前、銀秤から始まった私の秤の収集は、個人のコレクション、私設博物館を経て企業博物館に引き継がれていきます。資料の散逸を防ぎ、後世に伝えられてゆく今回の選択は、秤にとってベストだったと思っています。

写真提供：秤屋 健蔵氏

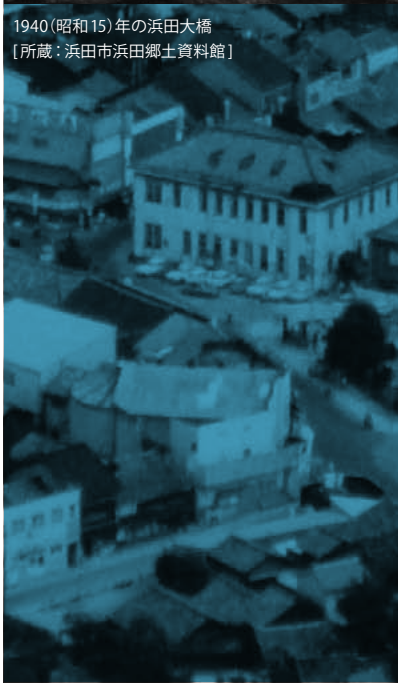
事業所のあった街をたずねて

港とともに歩んできた歴史ある街。

浜田篇

①昭和40年代の浜田大橋から望む帝国興信所(左)[所蔵：島根県立図書館]
②同じ位置から撮影した現在

1940(昭和15)年の浜田大橋
[所蔵：浜田市浜田郷土資料館]



島根県浜田市。松江支所の出張所として、帝国興信所はかつてここに事業所を開設した。1964(昭和39)年のことである。水産業を中心に地域の産業は発展の兆しを見せていったが、浜田出張所は73年、調査活動に終わりを告げることとなった。

■北前船の寄港地、城下町

東西に長く伸びる島根県は、松江、宍道湖、出雲を有する東部の出雲地域と、西部に位置する石見地域、そして隠岐地域に分けられるが、石見地域の中心となるのが浜田である。2005(平成17)年に浜田市と4町村が合併し、新「浜田市」ができた。浜田はかつて北前船が寄港する城下町であり、一大貿易港浜田港を抱える経済都市であった。

浜田港は1896(明治29)年、外国貿易港に指定され、昭和に入ると港は相次いで整備が進んだ。もともと漁場は豊かで、戦後は漁船の大型化や漁具・漁法の技術革新により水揚高が増え、水産加工業も伸びていった。

1619(元和5)年、浜田城を築城した初代藩主古田重治は、城の反対側である浜田川の南に八町を定めた。そのうちのひとつ新町は、大手門に通じる浜田大橋にほど近く、かつて銀札場、両替商、呉服商などが軒を並べており、明治から昭和にかけても商業活動が活発な場所であった。今でも金融機関は新町に集中している。新町が浜田一の繁華街であった時代、帝国興信所浜田出張所は隣の錦町に事務所を構えていた。

■調査を迅速に行うために浜田出張所開設

帝国興信所は1925(大正14)年に島根県内初の事業所として松江支所を開設した。松江支所は県内全域の調査を担当していたが、浜田地域の調査依頼があると、調査員は4泊5日で出かけて7、8件の調査をこなし、滞在先の宿で調査報告書を作成して翌朝には郵便で送るという状況であった。限られた人

現在の浜田港と昭和40年代の浜田港。(『帝国興信所報』昭和44年6月25日付)

数での調査体制を考えると、事業所にかかる負担が少なくないことは容易に想像ができる。しかしそんな状況も64年(昭和39)年6月の浜田出張所開設によって変わった。当時の社長後藤義夫が年頭に「今年はただ一つ次の基本方針のもとに今年を、迎え送りたいと思います。即ち『業務内容の充実』、勿論大きく言えば職場秩序の維持といい、調査のスピードアップといい、これに含まれるわけですが…」という基本方針を掲げた。調査を迅速に、正確に行うため、浜田だけでなく、北見、鳥取、徳山、直江津、佐世保、長野と相次いで事業所を開設し、全国調査網を拡充させていった。

当時の浜田の状況を知る資料として、浜田出張所開設5周年を記念した特集が組まれている『帝国興信所報』(昭和44年6月25日付)がある。島根県は産業において全国的な地位が低いが、浜田市は主軸を水産業とし、漁獲高も毎年増加。それによって水産加工業が活性化しているという。同紙面のなかで、当時出張所長を務めていた城家一二三は、「島根県は、人口過疎県として知られており、なかでも浜田出張所の調査区域である石見部の人口流出は年々増加をたどり、いまや重大な社会問題となっております。県当局では、人口流出防止対策の一環として、37年から企業誘致に本腰を入れはじめ、現在までに石見部に45社が操業を開始しております。というのも、浜田商港を基地とする対岸貿易の本格化とともに、明るい未来が約束されているからであります。」と述べている。

9年間の調査活動に終止符

浜田出張所は開設から2度移転しているが、1965(昭和40)年から閉鎖する73年までの間、浜田市錦町46大橋ビル2階に居を構えていた。69年の地図によると、浜田大橋の北詰にある建物の2階に塚田商事と並んで帝国興信所の文字を確認できる。実際その場所に行ってみると、「大橋ビル」は存在せず、「亀山ビル」が建っていた。近所の人に話を聞くと、塚田商事のことは記憶にあるが、帝国興信所があったことは覚えがないとのこと。また大橋ビルは道路拡張のため立ち退きに遭い、現在の亀山ビルはかつて大橋ビルに隣接していた亀山旅館が建っていた場所だということも教えてくれた。昭和40年代の写真と比較すると、確かに橋が拡幅されていることがわかる(写真①②)。

昭和30年代の浜田の商店街の様子を収めた写真は多く残っているが、提灯アーチやユニークな店舗の看板などに囲まれ、どれもにぎやかなものばかりであった。しかし、今その商店街で当時の面影を見ることはできない。細々と営業を続ける店舗を数件見つけることができる程度である。開設時すでに課題となっていた人口流出は止まらず、現在に至っている。浜田出張所は調査員の退職や経費の問題もあり、73年7月、閉鎖を余儀なくされた。浜田地域の調査依頼は県外企業からのケースが多く、いわゆる「調査拠点」で地元顧客は限られていたため、事業所経営はなかなか改善されなかったのである。

浜田出張所が担当していた調査地域は、閉鎖後約40年の間、松江支店、宇部支店、広島支店、山口支店で移管を繰り返して、今再び松江支店の管轄となっている。山陰地域の日本海側は高速道路が通っていない所が多く、松江から浜田までの道のりの半分以上は一般道となる。今でも県内水産食料品製造業のうち、約4割のウェイトを占める浜田。調査依頼があれば、調査員は片道3時間かけて車を走らせる。創業以来続く、現地現認の姿勢は決して忘れられることはない。

帝国データバンクの出版物は創業以来、幾多の企業広告を掲載してきた。100年前と比較して、広告はどのような変遷をたどったのだろうか。

広告いまむかし―4

丸善

『帝国銀行会社要録』第7版に掲載された広告

専門誌に出稿する現在の企業広告［写真提供：丸善株式会社］

広告は、時代の空気感や世相を表わすと言われている。丸善の広告が掲載されているのは、1918（大正7）年発行の『帝国銀行会社要録』。飛行船に見立てているのは、当時丸善の主力商品だったオノトというブランドの万年筆である。

丸善株式会社 経営管理部総務グループ長の川澄美佐緒さんは「この広告が出たのは第一次世界大戦中だったことから、当時ヨーロッパでの民間航路を開始したと話題になっていたツェッペリン号に、平和の意味を持たせているのではないかと推定されます。万年筆は、当時の知識人たちにとって唯一の文化的ツールでした。広告に書かれている文章からも、ペンは剣よりも強しと言う、反戦への強いメッセージを感じます」と説明する。川澄さんによると、丸善は関東大震災直後に発生した火災で社屋が全焼。その後第二次世界大戦時には空襲に遭い、資料のほとんどを失ってしまったという。残されたわずかな資料からわかることとして「当時丸善の広告を担当していたのは、ドストエフスキー作『罪と罰』の翻訳家として知られる内田魯庵です。内田は丸善へ1900（明治33）年に入社した社員で、今で言う広告宣伝部長のようなポジションでした。広告のコピーはすべて内田によるものです。1897年から刊行している丸善のPR誌『學鐙』の編集長も務めていました。万年筆のほか様々な広告が掲載されていますが、1つとして同じものはありません。彼はアイデアマンだったようで、1912年に万年筆カタログを出したのですが、その際夏目漱石に宣伝記事を依頼しています。漱石は、このオノト万年筆で『こころ』を執筆したと言われています」（川澄さん）。

丸善は1869（明治2）年、医師であった早矢仕有的によって創業された。福沢諭吉の門下生だった早矢仕は、貿易による国益が外国商館に奪われることを憂い、福沢諭吉の著作物販売や洋書、医薬品と医療器具を販売する商売を始めた。さらに万年筆やタイプライター、衣料品、家具など、西洋文化・文物の導入という商売を展開していく。

「創業以来丸善は、店舗部門、出版部門、大学に対する法人部門がひとつの会社として事業を続けてきましたが、2010年に丸善書店株式会社、2011年に丸善出版株式会社に分社しました。丸善株式会社では大学などの研究機関や先生方、図書館を顧客とする事業を行っており、今はこのような広告を専門誌に出稿しています。この羅針盤は“時代の羅針”として当社の社歌に使われている言葉から着想を得て広告に入れています」（川澄さん）。

丸善の使命は「知」を提供していくことだという。時代によって変わっていく知の形を、創業から一貫して追究しているのである。

夏目漱石に依頼した宣伝記事「余と万年筆」。
内田魯庵と交わした万年筆のエピソードから始まる［所蔵：丸善株式会社］

セミナーにて講演

2014年2月24日(月)、大日本印刷株式会社(東京都品川区)で開催された「DNP P&I Solutions セミナー」にて、当館館長の高津隆が講演を行いました。昨年開催した特別企画「日本の会社展第3回　企業博物館－逸品解題－」を通して見ることができた企業博物館の役割について、「企業ミュージアムの役割と責任」と題し発表しました。当日は企業の博物館、広報、社史の担当者をはじめとした100名超の方々が参加されました。
また、3月4日(火)、ナカシャクリエイテブ株式会社主催の「周年記念事業ステップアップセミナー」にて、高津が講演を行いました。名古屋都市センター(名古屋市中区)を会場に行われたセミナーは、「社員のための社史制作とアーカイブズ」をテーマとしており、高津は2012年に当館が行い、『別冊Muse2012』の中で発表した「新百歳企業13,000社実態調査」と、2000年に刊行した当社の百年史の制作秘話をもとに「長寿企業実態調査から見た社史編纂への取り組み」と題し発表しました。当日は周年記念事業を考える企業の担当者など、50名超の方々が参加されました。

周年記念事業ステップアップセミナーの様子
[写真提供：ナカシャクリエイテブ株式会社]

テーマ展示開催のご案内

帝国データバンク史料館では、2014年9月2日(火)よりテーマ展示にて新企画「TDB情報最前線『日刊帝国ニュース』創刊50年の歩み」を開催します。創刊から50年を迎えた、当社の倒産情報誌の変遷をご紹介します。会期が近くなりましたら、随時ホームページでご案内します。

『満州語辞典』刊行

『Muse』22号 温故知人登場　河内良弘先生が編纂

編　　著：河内　良弘
技術協力：本田　道夫
発 売 日：2014年6月30日
発 売 元：松香堂書店
定　　価：30,000円＋税
体　　裁：B5判　上製函入1,200頁

前号の『帝国データバンク史料館だより　Muse』の巻頭でご登場いただいた、東洋史学者、河内良弘先生が編纂された『満州語辞典』がこのたび刊行になりました。
満族史や女真族を研究されていた先生は、1970年代末、アメリカのインディアナ大学に赴任されました。そこで満州語を教える際に、文法書もなく、辞書も日本語の『満和辞典』を英訳したものしかないという状況に直面し、帰国後自ら満州語の辞書を作ろうと決意され、編纂作業を20年以上にわたって行い、このたび出版の運びとなりました。河内先生はインタビューの中で、「満州語辞典がなければ満州語で書かれた資料を読んでいくこともできません。」「言葉が無くなれば、それを話す民族やその文化までもが失われます。言葉、言語というのは民族固有のものですから、満州語を伝えるということは民族性を保存することと同じです。(略)だからこそ、今のうちに日本と満州語を繋ぐものとしての辞典を残していきたいのです。」とおっしゃっています。『満州語辞典』には、このような河内先生の思いが詰まっています。

TEIKOKU DATABANK Historical Museum
Muse 2014.7 Vol.23

表紙のご案内

扁額「至誠努力」後藤武夫筆

後藤武夫は全国の事業所を巡視する際、各地にこのような書を残した。この書は1929（昭和4）年11月、当時の旭川支所長宛に書かれたもので、2011年まで旭川支店に掲げられていた。「至誠努力」について、武夫は自著『後藤武夫伝』のなかで、「至誠とは百分の一、百万分の一だも不正を交へざる絶対正直の意味であり、努力とは身体に害なき程度に於いて最高最善の勤勉を意味するのである」と述べている。現在は帝国データバンクの経営の信条である「脱俗主義」「大家族主義」と並び「至誠努力主義」として連綿と受け継がれている。

帝国データバンク史料館
〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8　TEL.03-5919-9600（直通）

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

［入 館 料］　無料
［開館時間］　10:00～16:30（入館は16:00まで）
［休 館 日］　土・日・月曜日および祝日、年末年始
（その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。）

交通のご案内

［ＪＲご利用］	中央線・総武線 市ケ谷駅	徒歩8分
	中央線 四ツ谷駅	四ツ谷口から徒歩9分
［地下鉄ご利用］	南北線・有楽町線 市ケ谷駅	7番出口から徒歩6分
	都営新宿線 曙橋駅	A4番出口から徒歩9分
	丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅	2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp

帝国データバンク史料館だより《Muse Vol.23》2014年7月発行　©帝国データバンク史料館